

成形圖說

農事部
三

農商務省
圖書
第 號
共 冊

太政官文庫
和書門
八三二二
二〇冊架函號類

內閣文庫
和書
八三四二
三〇冊架函號類

| | |
|------|----------|
| 內閣文庫 | |
| 番號 | 和 8342 |
| 冊數 | 30 (3) |
| 函號 | 196 98 |



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak 2007 TM: Kodak



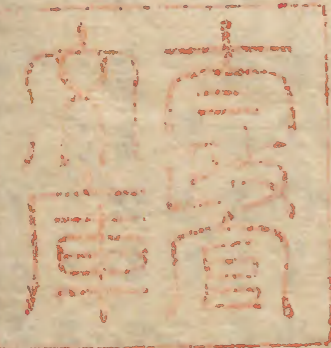
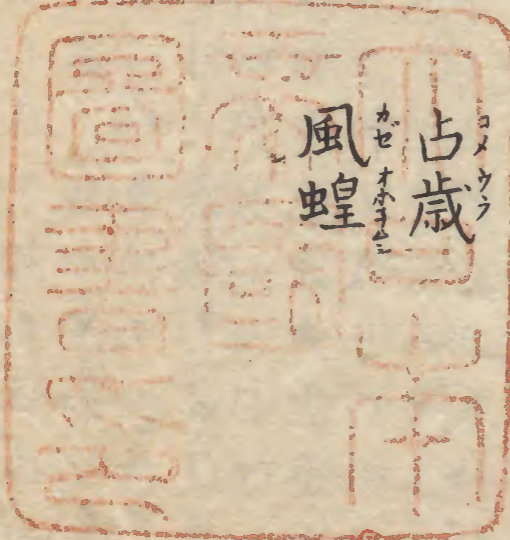
糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

成形圖說卷之三

目錄

時節 附四季

占歲
風蝗



明治十二年即求

成形圖說卷之三

成形圖說卷之三

農事部 時節類

登伎衰利

書紀○即時節也真字伊勢談

時節

左傳疏凡春秋分冬夏至春立夏為啓立秋立冬為閉用此八節之日登觀臺書其所見雲物氣色○易革

卦象傳

君子以治歷明時程子云推日月星辰之遷易明

四時之序

也夫變易之道事之至大理之至明跡之至著莫

如四時

按日月星辰之並稱一時節之云之我

小一其

明澄矣一堯典昊天歷象之謂時又日月星辰

とつふ

重仍似一夫天日の外にありて而後人地

月星ハ

日の光曜と受借て後象と見ゆありて

上ニ在

て其日月の交會と側り中極の星位と觀て以て

天行と

知ふと有り大戴禮曾子云聖人慎守日月之數以

察星辰

之行以序四時之順逆謂之歷名義におひく年さ

政其說

新よ似たりといへども又未だの建明あり○孔

子云行

夏之時と夏の時ハ今の節令とおれ一殷周ハ冬

成形圖說卷之三

と以歳首とせしめ
之時令正くは
蕃名テイト

孝徳天皇詔曰天地陰陽不使四時相亂惟此生乎萬物也
凡當農作之時宜早務營田令畿内及四方國催課農桑夫
時節ハ專耕作乃上よ係りてつふ亦寧ふ凡俗間ハ時
種時為付時刈上時瓦納時ふどつふと稼穡の時高とい
つり又節折節折柄ふどつふと即時節也夫本集よ春乃く
依り地の杜の
下藪よりまきとるや春後ろんよりまれろり時節とま
とまきろりまけいていつる○物乃をどより地時節とま
とつふハ地の指引より出て月乃おまほ入る月編乃刈
二度三度のまきといつる○又度とま言よ典利とつる
よりとつるま典と裏とまふより書堯典敬授人時註謂

耕獲之候凡民事早晚之所關也管子又凡有地牧民者務
在四時黃帝云四時之不正正五穀而已耳國語云三時務
農而一時講武三時ハ春夏秋めて其一時は即冬より民
の農隙ハハ武術と講せしむ也凡年中四時よりよりて
毎月二節都て廿四節あり然れ節序ハ遅速ありぬ此ハ
當年くの曆あり真曆考曰上の代の四時ハ曆乃節氣乃
刻と目しりて春の始ハ正月立春の古語ありきて立春
の次より二月の節乃次までと春の始より夫より三月
の節の頃までと春のまきと四月乃節の始までと春の
末とせ夏秋冬をなすとて知るは是れ如く之は

子かて始ふりバ末とはいふ一々ども其月とゆふ一
 年十二月と定むるおとハふりりき
扶桑畧記永承三年五月二日自太
 宰府進新羅曆與本朝元相違但十二月大小不同同年
十一月十六日自太宰府進大宋曆與本朝曆符合同五
 年十一月朔且賀條曰我朝異國其曆相
違古今例多然而公家不必用異國之說
 今按子皇國
 の時令直ニ年月の名小係て授命命るその表秋農事
 と終始と係る存ちる強是公の謂天地と書籍と日月
 と澄明とと係るは是とつら古事記傳曰年ハ田寄也
タヨと切てトとつらさしてヨセ
トヨザとと色云る例古より多し
 先登志とハ穀乃事なる
 其は神の御靈をて田に成て天皇に寄奉るゆふい
一は
因りり寄奉るといふと成て穀と登志と云也
古俗贈物の時向より又寄奉る物と入て成る也

実とつら大神宮年中行事の條は於終り小石と入て年
 実と号かて種るる何り年実ハ年穀の号とつらと係る
 志のつらてあるの厚き遠習なり
何り凶事の類は志のつらて成る
工商各執贄互相賀名其
 祈年祭祀詞ハ皇神等能寄志奉
贄謂年玉亦此意なり
 年奥津御年乎八東穗能嚴穗尔皇神等能寄志奉者云々
 又大嘗會乃時齋院と據て御年神大御食神と祭る係る
 是ふよとつら奥津御年ハ福とつら福ハ穀の中みと晚く
 後ゆ急又奥とつらなるは福の中みと晚く
 とつらふて初るはて穀と一序取収と一年は云加
シハス
ニヒシチ
 又年終乃月新福とて餅つらりて名て年終餅と云始て
 其餅と食ふと年取とつら台歳の福と成て夏家と近ふ

るあり是も夏御年とおれしく穀とて年取と稱
ふあり又稲の熟て生るはと若年とらふは年取と稱
やんじふど秋は渾り
春ハ草木の芽發の意は秋は木芽萎雨とらふ是也○月
令孟春是月也天氣下降地氣上騰天地和同草木萌動王
命布農事

蕃名シニテ

夏ハ茂立なりリと省き夕是稲の成立より一説は
夏ハ阿つきの畧あり後柏原天皇の大御歌夏冬もた
つたぬ時と天沖日乃比ひさゆもはたぬしとてみ

蕃名ソームル

秋ハ阿加利みてカリはキ是も稲の赤らむとらふ
アカルと云四季の夏秋を本此意みて稲よと云名あり
一説は秋ハ飽足の意俗は秋は満ちたりと云あり○莊
子正秋而萬寶告成○月令季秋之月命冢宰農事備收
蕃名ヘルフスト

冬ハ殖多ア年穀茂て恩頼のよみとありとらふ者孫好
忠款といふは多と云かひなり身はへ急ぐ武勇は海の色
とう信もいひるりとは信よ生のよき生乃りきとい
ふも恩頼の言ぬといつり一説は冬ハひゆるの轉也

蕃名 ウ イントル

正月ハ ムツキ 生月也 発生の始といふ 生ムス 息女とムスメとム
 り ムツキ 正月ハ ムツキ 生月也 発生の始といふ 生ムス 息女とムスメとム
 や ムツキ 正月ハ ムツキ 生月也 発生の始といふ 生ムス 息女とムスメとム
 利月 ムツキ 正月ハ ムツキ 生月也 発生の始といふ 生ムス 息女とムスメとム
 禮志月 ムツキ 正月ハ ムツキ 生月也 発生の始といふ 生ムス 息女とムスメとム
 逐子 ムツキ 正月ハ ムツキ 生月也 発生の始といふ 生ムス 息女とムスメとム
 本草 ムツキ 正月ハ ムツキ 生月也 発生の始といふ 生ムス 息女とムスメとム

花は 續るぞん 費あり

蕃名 ヤニエ キヤラキ イキサラニキ パーリーイ

二月ハ キヤラキ 氣更来也 生氣又ニ發達とほし イキサラニキ
 盛 キヤラキ 二月ハ キヤラキ 氣更来也 生氣又ニ發達とほし イキサラニキ
 梅見月 キヤラキ 二月ハ キヤラキ 氣更来也 生氣又ニ發達とほし イキサラニキ
 月 キヤラキ 二月ハ キヤラキ 氣更来也 生氣又ニ發達とほし イキサラニキ
 蕃名 キヤラキ 二月ハ キヤラキ 氣更来也 生氣又ニ發達とほし イキサラニキ

蕃名 ヤニエ ヲパーリーイ

三月ハ ヤニエ 弥生也 受ふおて 生氣亦盛ると ヤニエ
 は ヤニエ 三月ハ ヤニエ 弥生也 受ふおて 生氣亦盛ると ヤニエ
 成 ヤニエ 三月ハ ヤニエ 弥生也 受ふおて 生氣亦盛ると ヤニエ

四月ハ種月也福種と植る也一説は卯花月也
 梅雨也又梅雨の條はがきて花を腐る意あり西土云迄
 つゆととといふよよとて親長日記ハ梅雨とつゆとと
 と凌辱とといふよよとて親長日記ハ梅雨とつゆとと
 夏のさういふ事異名古乃波登利月きげねてハ何より
 此六のさき月持得鳥羽月鳥羽の花交にかく
 跡家〇一本に花残月さかづけ乃花此らる
 皇印花月山卯の花月と何といをまじ
 乃垣のいほりに
 蕃名アプリル
 五月ハ幸月也幸ハ農事とす農事を依じつと
 子出せりおの月福種と



息草家集
 五月廿一日
 田長れ
 ちてり
 ふれや
 ちと
 さくらんふ
 さくらんふ

分栽るなり也小倉山さ月のゆのとすゆ
ふり子苗えろてふ田子持法も各知家
即農事とつふり池まなふまおとほり
やめりり若子かざりゆさくも月とて小野
五月雨にやまきくまきゆくも儀男深月
月四らさ月とハ毛といふゆも儀男深月
初ん去付海のそ乃月不見月
お月雨此頃字家月不見月
いぬり橘月の語代り橘月の名とよめて
けむり橘月のふりし此のあつらん家隆亦吹喜月と
色云○丑の語よとの急しき成五月農夫といひ又五月
女ハ苗代名と鏡よとくハ子田ふりたてど橘去月おく
れどと五月の農功と急ぎめりゆ急田の面のあまて妹
が黒髪とり阿事ゆおりふととといはふぐうつけのを
ぐーを柳はありある加茂神田極の詞にととふの歌

は泥にうそよおれさるううり誹み農の業おど又
なふかうまハふしかはほみれ引く一ハまはみの鏡よ
向いてまふの邪歌ハみぐきほど紅粉香油とて髪面袍
まてぬり飾り冬暖よ夏いやくうたうと物好し後ハ舅
夫と色いもと志うりかかち婦女の身逆なるいう又
うり後の世乃くはしと交ふんとするもはましおとら
あるおぞ恥りしきまの波まがの雲の流るまらるる
ハいよく福免がらま何となくさあし志あぶの何ぢま
なくいでやそ罷脱んととらうらの佛より山こくむま
で漏いわりく却て息あり深障深まの佛いみまやぐ

て地獄より為ぬべき女ハ只美より縫織の乃を勤め男
夫よまめやりに己の口利を所々辛苦きくんと功徳
海と澄くまん便の舟とハ舟りふべし

蕃名メイ

六月ハ水月也福因と名を引よぶと云也
ナは語の助也
昔ふのゆらぐ乃舟りたりてよ
異名伊須々久礼月
暮月
とふのゆらぐ乃舟りたりてよ
神人等之
一は涼暮月風吹ハ池子波
成ぬる宮として奉迎院大子
○一は涼暮月風吹ハ池子波
妻子の川に流るる舟りく
風待月
ハ松蔭子来わとつづる
とさよ
常夏月
妹より乃常夏月
鳴神月
白雨ハ移晴やうである
神の月
松風月
乃今自よりハ

七月ハ穂見月也此月福穂出見と云

蕃名ユトニイ

七月ハ穂見月也此月福穂出見と云
異名米泥安比月
秋初月
風ふくは何と云い
七子
女郎月
桐機
出七夜月
今月也
何れがこのめでく
乃色にたくてわ名を呼し
文披月
乃軽るうて書ある
○是月と親月とを稱ふ
世に考祖の祭祀と云
よよと云り又生御霊と云ふ
とを親長日記文明八年七

月十一日の新子裁らぬなす魂と紫るあるあり人の
子モロオヤトミらり父母具存を慶ヨロコひて生津靈の礼を以て俗に諸
子祝と云年中の事孟蘭盆の類にて今日にて七月の節
蕃名ユーリイ

八月ハ葉月也ハツキ稲葉の色と変る也稲漸く熟ハ其葉あり
らぬ味と云初雁の来ききあゆありとけき

佐波奈佐月サハナサツキ花は月蓋亦農事と然ていづりきき
弟弟藝藝秋風月アキカゼツキ萩の葉乃雪あきききいづりきき
見月ミツキ名ハ秋の月長明ミツキ米深月イネフカツキ雨つはけし
してさそめ乃月サソメノツキ中津月ナカツキ色くに花咲てくをきき
海ふられあはる家海ふられあはる家中津月中津月進くきいづりききハ今日阿波の

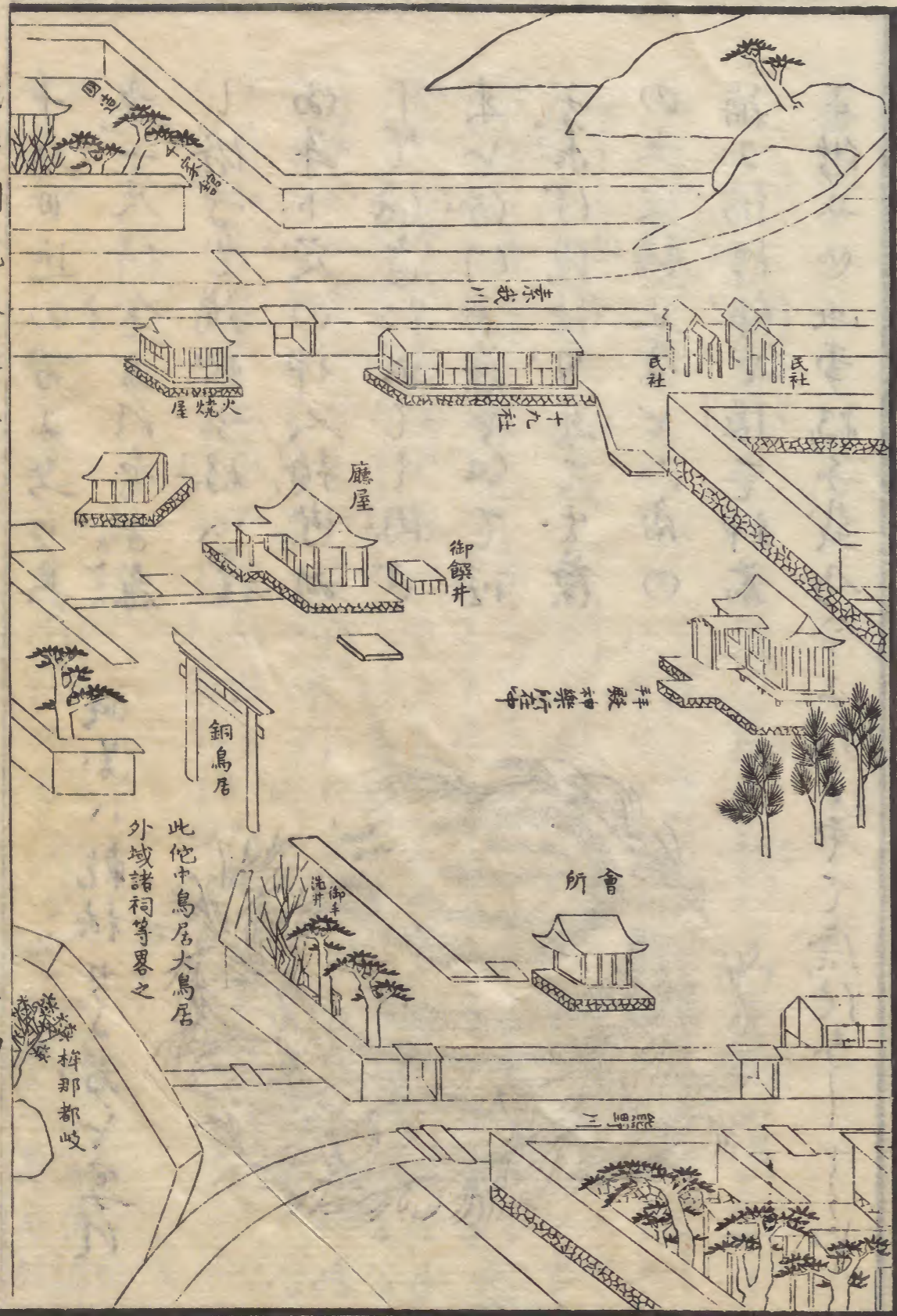
○是月と田実といふ千里の歌澄ほしし後按後暖

戦天皇八月朔日に新穀と御て田実と宮いし志と著聞
集に在り辨内侍日記室治元年八月一日の歌にさふハ
又ささきさきの名をかへてたのめむさき白とを

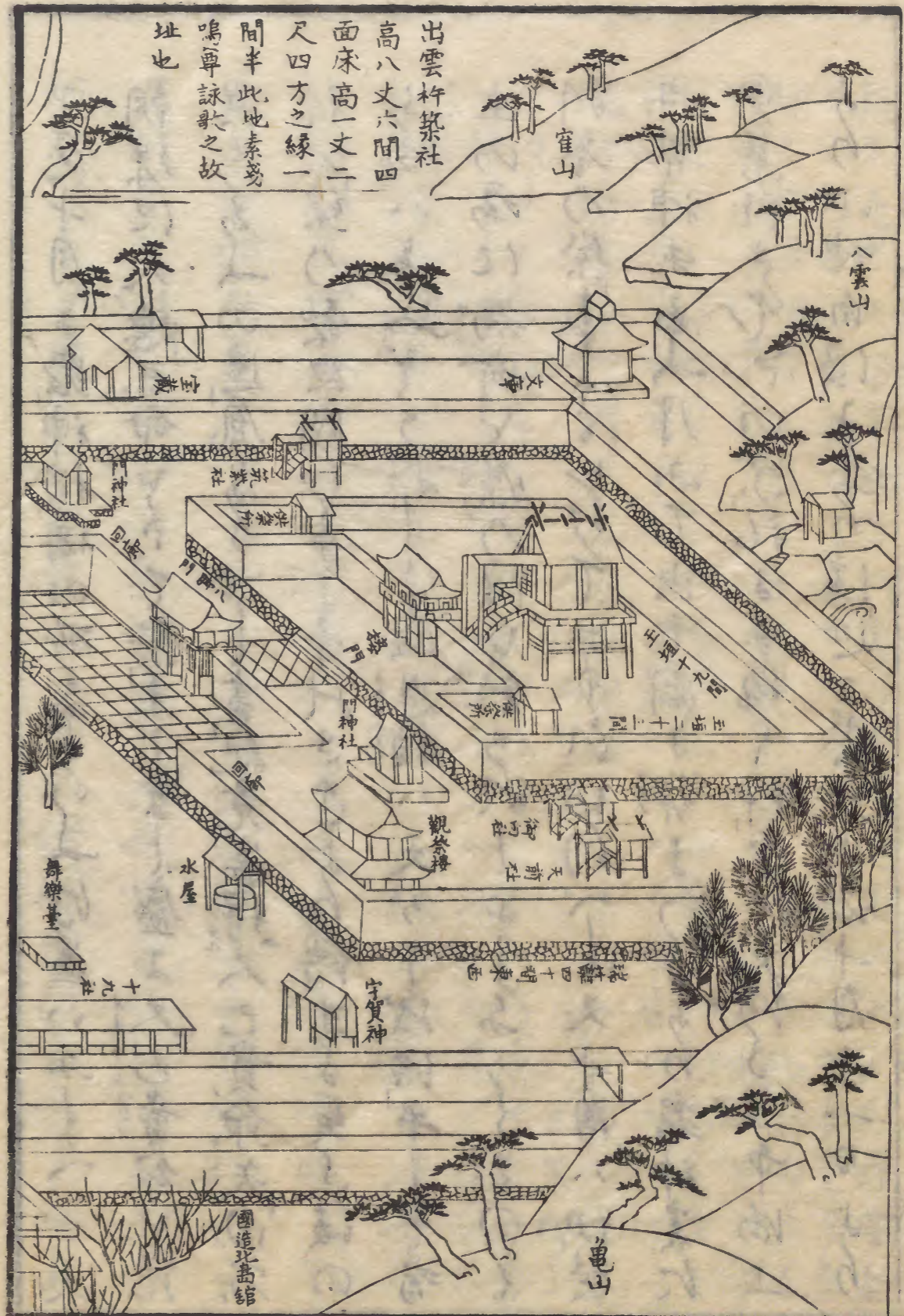
あゝ听雨齋集八月初吉詩序本邦風俗名仲秋朔旦
為憑日以資相贈昔は今日田実とて早稲米を好むかは
ら希多と感て親感互に取替けり文永記此七八年殊
に天下を流布せりとて今京師浪蕪までハ憑と云又
康富記にハ朔乃事 後鳥羽帝乃雪のささきり出末次
蕃名Pウギユステユス

祈來年干天宗今按々のまの日は是蓋いふ一神嘗祭
るに秋年の穀とてまの遠也傍のなき五を電りり
神子月誰が誅とる異名加美奈加利月まふ山いりりく
時雨月散とるまの葉のほれ何と深よし拾月秋の毛老
ハ秋のまのめし外神去月出雲の松乃葉さりの宮
ハ樹陰月と亦小春と云〇一説に十月と神無月
ととい又雷無月といふ事此よし名を是出雲國よて
是月と神在月と唱つるとの俗流に據るも也今按よ出
雲梓桑大社ハ天下の名神也て其本宮ハ宍神五主乃
位と没布又廣前乃た亦小日國の諸神會いふつゝ洞あ

己是十月も衆神招禱の所とていふは蓋いふ一天
朝珠に天穗日命とて祭主となし盛よ大己貴命とオホナニギ衆
異とるよの造風とて書紀竟宴得大己貴命矢田宿
祢公望乃歌に國じりし牙れさきよの侍来る是く波の
ふゆハあふぞうれさ此恩頼ハ天が下治平と有
生の為に病疴と療乃法と創られしよしふぐこのを
川冬乃祭事ももかけてゆゆのいりべし又十月ハ伊弉
冉尊神去ま月ふて出雲國子葬まつるより衆神宴に
會集はさして此の祭礼よさへく神宴と何るが中海上
より小地白浪も是り浪辺よまあるは十月十一日より



出雲杵築社
 高八丈六間四
 面床高一丈二
 尺四方之縁一
 間半此地素茂
 鳴尊詠歌之故
 址也



十五日近の宵に其
 大一尺許金を以て
 し俗に於て龍地と稱し
 傷年卜定の神人預
 して海邊に出て遊
 来と流しに於て神
 子氣に龍地を以て
 の上に幡止ると六角
 箱に納標繩と張て
 神前
 子供也此事故子戴
 乃今子到也



此は乾枯也其を若と写し

蕃名ヲシトヲブル

十一月ハ霜春月也此月福と擽と穀と上り納也いふ
 一ハ穀擽と春といつり一説は霜降月の暑きなり
 ぬりらむる異名志毛古利乃波月と云ふは霜降月の暑きなり
 けりぬる人丸雪見月暑つる雪のきまはるる月也
 降月風を以て降りし月也此をより和宮乃氣神樂月
 宮居のかかり月立神樂神来月のかきき月天乃宮戸乃
 乃喜のゆきけさ定家神来月のかきき月天乃宮戸乃
 々やゆ雪待月山風と雪待月といふはゆきけさ定家
 くらん雪待月喜けさ定家といふはゆきけさ定家

蕃名ノハムブル
 十二月ハ霜終月也此月田稻の事終る也
 一説は霜終る也

ありとつゝも農事終るるといふや倭成の歌よ井
 掃り山田と冬に成てそとさまりし世乃程ハ
 くれ夫年穀と納と之者乃流とそ言回しその義觀ふべ
 一〇何となく志を以ての字にぬきりしそ
 此故也 異名登志與通年月 外に上二年せ積月いくさ
 業平 中へうある時ぞとてさす 春待月 年ハ
 三冬月 月りそふ積る雪の閉けさ定家 春待月 年ハ
 月その老あれど春は梅初月の花ハまが登む枝々とほ
 包めく親子月 吾いと御免とま月も木也こ月松や
 形始 親子月のちり例ぬん〇亦久礼古月の名阿り
 今取此志毛月志波須乃兩月乃名ハ神樂歌に御福看女
 乃志を以て志は流りかひこちらといふよ井り阿り
 〇古ハ春乃書と歳の終るとに祖先を祀るるや故又
 親月ハ名わ中曾丹集玉なる年終終よぬまら也今日又

屋又と阿らんよつん 和泉式部まの晦子詠るな
 し我信希や徒然州志は乃のつはりの根ハあき人の
 ある故とて鬼考るわざハこの頃京月乃年ハ東の方
 子ハ程ヤらふとて阿りそわられなり

著名デセムブル

閏月ハ始仲哀紀ハ身力敏達紀ハ潤月と行ると潤餘乃
 義多れば也 精蛉日記ハ和二年の所又歳毎ハ阿らハ
 清寧紀後月と訓ゆり又うも年と阿るも清ハ潤年
 とらんわ克典以閏月定四時成歳〇穀梁傳云閏月者附
 月之餘日也積分而成于月者也 史記秦宣公 天の運行三

百六十日と立て月よ丈小わりはる六月と氣盈とし不
足の六日と朔虚とて此過不及と合て十二日三年積年
二十六日の餘りありとて三年に一回と立て五歳子
再回十九年小して七回に及べば餘分なし是と一章と
凡天周三百六十五度四分度の一と云ハ生一度教
の素今日乃初昏は是れハ昨日乃新よりハ少く西
(おふり)よりハ移の間にハ一度と立て何又天より積
ハふし毎日常の如くハ一度と立て何又天より積
六十五日の上又一日と四分に割るハ一何と云ハ
初て足分は所は四なり多より冬を至まで夏を至
ハ夏を至まで冬を至ハハハハハハハハハハハハハハハ
とて年月と記せし故ハハハハハハハハハハハハハハハ
者ハ艸木の榮枯もて春秋と識し海島ハ潮汐丈小よて
朔望と察して差はる事也○天周と曜曜の左旋と右
ハ左旋の曜ハ蟻乃右行追却なりと日月の右旋ハ
て故は日月常に天行を追却なりと日月の右旋ハ

せり言ぞ夫日月小して豈蟻出の如く是あらん哉蓋天
周乃日行より早ハ却て天日の火氣盛なるは退れて運
轉の速なる身彼蒼くた特和蘭ハ餘日と一月づくに配
是者日火の煙氣短なる日て閏と多と又開國より己未何子何百歳と暦代と紀
し年號改元の事なし○或曰閏月ありは歲ハ時候も三
十日後ふ余多なりと云ハ三十三日長とも立てハ氣
候の差あり且去日如おけはるは秋田濕かふは閏年ハ
一候より以前極とてハ又農家の本家の花実と葉謝
と観て前極の節とも観て去の極もれども去より暖か
れば花さくはと時より先より秋風吹られは葉葉遅しそ
衆の照曜より開花の遅速は農事の終をゆづる

なく時子後まぬやうにふとさうなり野談ま前いら
 ぎは後いりぎとつふと農家の第一は志保づきわざ
 なや以上の田事と年月の名も係てついでありて先と
 特て耕治と考つふはたつ次真替考といふ一ハ
 了此のおのけりるふふふと一替ハ来敷みて一月
 終ると取へ民ハ授きとつと時ハみづううよくあるは
 ゆく名をきと民ハ授きとつと時ハみづううよくあるは
 とみて先去年も此おありと書籍の花咲とえてハ苗代時
 とさうなりおさう麦の種のとつとつとつとつとつとつと
 時と志保又その福の刈時とつとつとつとつとつとつと
 とく年とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

う記すハ何とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 苗と佐苗といふ植之とつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 開とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 月と佐月といふとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 種とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 真田と佐奈太とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 るとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 種ていふとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 幸福の字古ハさきとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 成形圖説卷之三
 十八

○夫田地ハ春耕と第一と次是と春田と云々春は陽氣
發散の時ゆ急耕といふ事て土壤をよく膏ホウラウ子解トキて地脈よ
く通る潤い起トキ揚トキき多り國語號文公云農祥辰五日月底
于天廟註農祥房星也立春之日晨中於午農事之候也凡
春の耕を打起といふ冬月子春はなは次と阿里或云打起
ハ仲春より迄凡田土膏澤ホウラウの氣は反サカり多シく土ツチは潤ツルい
づふとのなり之を冬月は反サカては冰霜ヒヤコは閉トらるる事コト耕
棄スツ從スふあり又曰去用ハ土を動ウかす事あり去用ハ動ウ
る土ハ功能コト多シく田畦ツツを二月申ウラハに塗ヌりば堅ツかす次
して去持ありハ土の性秋冬ハ重オモく春夏ハ輕カサく冬三

月ツキハ土と炭ツと向ムカひ重オモくあり三日ミツ過ぎてハ炭ツ重オモく土輕カサ
ト是と無炭ツと云々と史記シキに云々コト○秋分の時と
天日ツルヒ昼夜ツルヒのとき時トキ急地ツ氣キは和暢ワカウ里土と反サカりよ後
リ是と秋田ツと云々春秋の時トキ是コト就ツて田と耕ウハる地チの
自然シズカに則ツてツて田タ民ミンハ人の倡諭ホウガ地法チホウに及ツび五穀
ハおの事と苗芽メダて四時ヨシの節序フシは示シるもの也是乃天日
の運行次第ウツクシに生ナ成シるものにて而春秋分の二時ニトキと時正トキマサ
と云ハ此時天日赤道の天中と運ウツクハるものゆ急四節ヨシの
内ウチありと寒サムイ暖ノボイが合アはりて農事ノウジ成シるものなり時ありと唯
農事ノウジのコトこれらコトは春秋分の節フシ何ナニも昼ヒラキ秋アキに作用ウツクを耕

出次重し為事のたうりて成功の速く時を冬夏の暑
 寒のハおりの根より是を動作かまぬもの也 俗謂、彼岸
 の後二月たり埃囊抄曰彼岸晝夜齊等如比兩岸左右均
 等故云到彼岸とい佛書にありて此の秋なりと
 一砥平石録に云くせり或曰秋彼岸中酒造り三七
 日月のハ秋酒造り僅に彼を過て寒の節に入て
 造る酒ハ十日と色ざれば出来ぬ其の寒暄の氣
 人間の膚におおぼえどして海の成習かくのごとく
 や地より生る草木もハ又冬至ハ天日赤道より南
 この分りたるとは又冬至ハ天日赤道より南
 偏より二十一度 凡一度よりハ地の一里三十
 六町ありて北ハ里七町十二間
 北より南と極陽の至と此時大木の葉と種畢は終て又
 始るの及と云るなり又夏とつるハ天日赤道より南
 北より南と云る亦二十一度ありて極陽の至と此時

早晚種と種早る始り終るもの及と云るなり其の二
 時ハ申道の最はありとされども物極まばまゝ存へ復
 るゆ急傷の中を湯ハもや芽一陽の中を傷ハおの
 つらう来たりなり田と耕し種は播きと常より時先
 考へて心算て時よ深きややめを種後て種
 きのハ成実少く虫附おと何り 皇國ハ天日の運移し
 まつらみて大凡畿内ハ北極星地と出たると三十五度
 東奥の極ハ四十度西南の邊ハ三十一度までみて陰陽
 通正の土地ゆゑいづもの不也と五穀を出生と家畜
 の上國あり漢書通典及宋史明史などよと倭國ハ土宜

五穀とつり五禮通考云自中土而南寒漸平其冬或如
 春秋焉而一歲兩夏者有矣赤道自中土而北寒愈甚其夏
 或如春秋焉而春秋已同乎中土之冬矣赤道北四十餘度
 北極出地四十二度強南京北極出地三十四度又北方の
 大強故南京の如き西地の中土と云ふ一
 德墨多國ハ天毎日雨あり西極の泥入多國ハ年中雨
 あり堪輿廣大ありて如きは偏熱偏寒等の地世ハ較
 多あると云なり志は或は戎人の陰陽通止の樂國を生
 ると云ふ五穀稔らむに衣服給ふに便なると常は根之類ハ田
 疇の習はて又着るハ是非ありと云ふ凡使は是を
 のハ上は天道生くるの德あり人間受取て地は播く培費

とて其化功と相係と記ハ物として淺き事なり
 の本と云りハ常は農粟と穀ハ樹藝と力志むる事
 と云ふ也或曰冥東ハ陽國ふして之を寒甚し死ハ陰の
 地中ハ冷なる氣あり陽の氣ハ暖なる氣あり是ハ因て暖國ハ即
 ち地中ハ生る氣あり陰の氣ハ平の地ありて地上冷なる氣
 あり地中ハ生る氣あり根切虫葉虫生して作らば害ハ何
 なる地中ハ生る氣あり但油虫と云ふもの作らば毛と殺し
 國一統の出は何れも如くは東ハ暖まると西ハ冷まると
 風立て西國のやうに思ふは或は夏ハ雨あり冬ハ雪あり
 年夏河西縣大雨雪皆如括捲大者或如斗殺畜生雉兔折
 樹木冰雨ハ氷ありは偏陰の寒天ハ衝昇て即ち氷
 也と云ふは其の偏陰の寒天ハ衝昇て即ち氷

ふれバ抄物と云ふ所の入るるハ物と深て色
いで候と云一況ハ水雨ハ山中の凝氷と夏月暴風と不
吹揚る不と記勝之書云凡耕之本在于趨時和土務糞澤
早鋤獲春凍解地氣始通土一和解夏至天氣始暑陰氣始
盛土復解夏至後九十日晝夜分天地氣和以此時耕田一
而當五名曰膏澤皆得時功春地氣通可耕堅硬強地黑墟
土輒平摩其塊以生草草生復耕之天有小雨復耕和之勿
令有塊以待時所謂強土而弱之也春候地氣始通椽椽木
長尺二寸埋尺見其二寸立春後土塊散上沒椽陳根可拔
此時二十日以後和氣去即土剛以此時耕一而當四和氣
去耕四不當一杏始華榮輒耕望杏花落復耕耕輒藺之土

甚輕者以牛羊踐之如此則土強此謂弱土而強之也春氣
未通則土歷適不保澤終歲不宜稼非糞不解慎無早耕須
草生至可種時有雨即種土相親苗獨生草穢爛皆成良田
此一耕而當五也不如此而早耕塊硬苗穢同孔出不可鋤
治及為敗田秋無雨而耕絕土氣土堅塔名曰脂田及盛冬
耕泄陰氣土枯燥名曰脯田脯田與脂田皆傷田二歲不起
稼則一歲休之凡愛田常以五月耕六月再耕七月勿耕謹
摩平以待種時五月耕一當三六月耕一當再若七月耕五
不當一冬雨雪止輒以藺之掩地雪勿使從風飄去後雪復
藺之則立春保澤凍虫以來年宜稼得時之和適地之宜田

雖薄惡収可畝十石○夏より秋の季より東の方より
 先物尺ゆりことり之と福妻福光福文など呼り俗
 子福光多きやハ福よく稔るあり故に福の夫と妻
 とをいふ侍一里和名鈔並に福の名子係き連は来る
 由を久しきことなり古今六帖に福妻ハつけらふ斗
 何れも秋乃田のまハ人志より又雷ハ怒祇小
 て又日水鳴と云火神日高祇の生示と書紀には見え
 たり日火の激あり雷の始て鳴発の時日氣地中徹
 高子農耕と作とるきの時といひり易鮮卦雷雨作而
 百果草木皆甲拆草應物が詩に微雨衆卉新一雷驚蟄始

田家幾日閑耕種從此起按天日之火氣地下薄
塞り滲り水雲と突破とさハ激奇山川と動ト大塊と
激あり火と水と投ト或ハ氣は炭に火とつけて激
ありらるとん又大子塩燭と燄ト鳥泥と鳴也下
富士益救の巔に登て雷と之由ト奔逆高よ非
雷ハ必地中より起るの五雜組云雷之形人常有
見之者大約似唯雞肉翅其響乃兩翅奮撲作聲也宋儒以
陰陽之理解釋雷電此誠可笑雷の難み似たりと云
紀の中にもあり五雜組より早くし吾弱年より物部茂
卿に或者雷の金鉢と向し對曰吾弱年より物部茂
ありて腹中腹く鳴とめさむるに根のわき
と考れども六十二まで終りれども我身の中な
ぐいったるかぐりりして吾等決してあり
し地の神妙陰陽の不測に吾等決してあり
笑ひとくや是ハ五雜組にまさりしと答あり先日火
の氣とくや是ハ五雜組にまさりしと答あり先日火
ふとあり或曰是ハ俯ぶして心氣と丹田を

あり凡雷震るの時子登るる来ハ立所子裂碎横み臥し
 傷るのふあり秋の氣候もなれば天日漸く南志多し雷
 鳴と稍轉りて激なり唯火光のを見出と河り美葉子
 霹靂の日香天の九月と泳めふ是也一況子熱閃ハ山中
 の巖石より起発候といつりこの時分も稲穂も方小登
 熟とて其尤物も託て名希とぞ是も古人の時と命
 て今年穀の予もかきていひ一お意と想ふ至し代近記
 子越後國よハ冬もよのつみのぶとく神の降あり特
 雪の始て降じとそハおびとく一々鳴おとく又漸の
 満涸のかはるる一さればいづとて雷ハなるるる流

其電光をいひふよのときふとく人間の知るまはふ
 阿ふふふをふとく一ふとくハいうほどあや一きも疑ぬよ
 一たじり一とるすの川の海も入て海ハ溢ど日出て角
 へる其止ふ交とまらばはぐれく天地の神妙わざとい
 うでり人の知るるをさく其迹もよりかくハいへるのこ

米占書紀通證古語拾遺占求と以て始と後後新書は
 ろる此頭昭曰けりハ掃保也家の八等ハ電と云石髓
 小と民間除夜電と掃ハ以来年の吉凶と占ハ此電輪
 夕占萬葉集又夕禰問石夕食拾芥鈔夕食と同歌よふ

と問はは通り人よ占正シ子せよ見女子の言子黄楊の柳と
林女三人三樹子向の向入と云は秋と三度諸へ場と作
一葉と云一掃嵩と云は云々之度場の内子来る人の答
よて言出と云うと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
夜占問ふ名神よ多く白
零と云うと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

占歳世本云后益作占歳呂氏春秋亦云示師曠占五穀貴
賤事物紀原占歳十月朔日風從東來春賤逆此者貴

ト稼禮記社之日位米ト番馬雜編

蕃名ホールセクギンクハニレイケヲフニカパールセヲ

ヲグスト

田家ハ毎年正月望子米占管試コメヲクダタシスウラキナとて々米又

ハ来年の農稼シツケカと決オホる事オホて其乃達チカは保ホと亦オホ奇オホとい

ふべしオホは田家オホてハ正月十五日と望年オホと稔オホて感オホ且

よりハ大切オホに祝オホて親オホ子オホ兄弟オホ一オホ不オホ子オホ會オホ集オホ婦オホ

もて親省オホがてオホて來て向戸オホと杜オホと他客オホと辞オホて物忘

一田神オホと祭オホと稻粟オホ菽オホと始オホとて一切オホの種子オホと大釜

よ入オホて粥オホと一節オホとオホ竹筒オホ若干オホとオホ毎オホ日オホ

粟穀オホの目識オホと或ハ刺オホと或ハ書オホし粥オホの中オホに投オホ之オホとオホ

赤オホと教オホ沸オホして後オホに竹筒オホと取オホ上オホるオホと皆オホの内オホに各オホ衆オホ穀

の入オホと否オホと一盃オホとオホ填オホ実オホとオホけオホりオホと或ハ某オホの稻オホ備

ハ某オホの稻オホの有年オホあり某粟オホの満オホハ某オホの粟オホの有年オホと云

又中オホありハ中オホ年オホありハ高オホ斗オホと志オホとオホ高オホ穀オホ皆オホ充オホ実オホハ五オホ穀

の豊オホ稔オホと云オホて後戸オホハ各オホ占オホとオホお訪オホいオホ海オホ食オホとオホ作オホて秋

浅と祝禱あり 俗志曰河内國枚岡の神社は田祭と
云ハ御粥後ハ大なる釜とて煮小豆粥と
煮て祠具と一五穀の禱終りて竹と五寸をりり伐り
管となしたるを五十四本とて五穀及をりの禱の
五十四本とて煮て釜の中一投一く釜とて煮りて粥管
の中に入らるる少或ハ煮の加減とて何乃種ハ十分
飯の種ハ八分とて煮れハ神主とて高き山と上
之上の神子なる近國の農民祭祭して其の善惡と書有
きて神卜は但て農事と勤るゆかりとこれと枚岡の御粥
と云ト田祭と云と云又曰強少海那三穂の根原三種
神に毎年正月十五日筒粥神子あり大釜にて粥と煮
る竹筒ハ五穀を分けて煮て根原神子の名とて煮り
入るるゆかりと煮りゆの一盃とて煮りゆと煮りゆと
此と云は俗作と不伝との名と云ハ枚岡の農具并ハ五穀
の羽振苑ハ地と云は正月朔中より亥日ハ農具并ハ五穀
の祭あり成はるる夜士民等一切の農具并ハ五穀
の種子と混雜して一釜と煮り西野書曰行曆ハ換行
て神人の名とて煮り神人混雜の穀子とて一揃とて
は授け上民皆て煮りて其の種子とて煮りて其の
擇て當年は前におもはれハ其の必成実多とて成はるる日

次紀と祝禱也、神名秘書ハ風神の祭ハ柏流と云ハ阿
其柏流と云ハ浮い流也凶年ハ沈之流ハ四月七月阿
と云ハ尺之流と云ハ續古今集思ハ阿まる三角柏り同
の沈ハ浮ハ流なりと詩小雅大人占之衆維魚矣實維
豐年 註埤雅俗云春魚遺子如粟埋泥中明年水及故岸則
皆化而為魚如遇旱乾水不及故岸則其子為日暴乃
成飛蝗故說者以為陰陽和則魚多豐年變魚埋或然也 戒菴漫筆ハ東入吳門十萬家
家の爆穀ハ年華就鍋拖下黃金粟轉手翻成白玉花紅粉
佳人占喜事白頭老叟問生涯曉來粧飾諸兒女數片梅花
挿髮斜この年華トハ上元の夜ハな次ト云ハ歳時記
よ尺之流と云ハ齊民要術年の豊凶と云ハと云ハの清人

八正月七日より十日まで天氣和清なればそ歳を越す
 時より云々四事物語は漢語鈔と列て入すしの夜ハせり
 ごとくつむとて寫き卷よのかせて表ははるは海よ着
 ふして好のうの運みるすもや堀川面首はとどは
 のお母けりあまよせりこくと揃ふぐらよ年々越す極
 月晦日登岡自我兩足間觀居地之氣知明年吉凶是云岡
 見又吉凶の氣とよとどははるは續貫行曰正月元旦雨風
 なく曉の雲河のぐとわやるも紫くちくも雲霧海日
 ちまひきて聞ふといぬ生年がらのよろしき瑞はに按
 朴樹の新葉と芽は速速わりて芽の速く出る方より大

風もあたらしくあまなかり百姓農曰自然の運來涼理
 きてくるくを考あらばるぶふとよきうんう志くれ
 どもて地冥闇と来風雨陰晴同き年の絶てあまの理
 子六十一歳ハ舊曆子徳とらふと年の干支こそ圓
 来也節氣まで合意とらふハあらど凡天氣ハ諸必東西
 南北同一あらど凡地よまて山家の天氣ハ老農よ
 考ぐる浦溪のそ来ハ漁夫船長よ尋ねべし尤俗諺也
 とも考るをくべし又ゆて考めると考べしは常るん
 よとめて試むべしとらふ凡天氣と考て毎子戒
 れハ其功也蓋よハあらざるはとあり兼ての用ハ豫費

雨ハ必山子添ふとの取山の方より風おとすはかあるが
 ると第ぶなる○蝗虫の福田子害はるる既に神代紀子
 昆虫の災を記されしと始りてお洛拾遺子ハ其驅除
 以麻柄作靴以其葉掃之以天押草押之押草ハ蓋以鳥
 羽扇之以牛穴置溝口作男莖形以加之以葱子蜀椒吳桃
 葉及塩班置其畔と今東北の邊土子男莖の形也
驅除一の遺習ありて俗子弓削の道鏡又三代實録貞觀
 と祀るといふハみづからとくたつて
 十六年八月伊勢國言蝗蟲食福其虫頭赤して丹のごと
 く背青く腹黒班ありて大ききものハ一寸五分小きもの
 ハ一寸一日食して路四五町をかり其過る所ハ遺穂を

丹頂の稲虫ハ爾雅釋是月十三日玄蕃頭弘道王と伊
虫の蟄蟲なりと勢 大神宮に遣一幣と奉り蝗災を禳ととと禱る自後
 蝗虫或蝶と化一或ハ蜂の爲に螫殺されて一時に盡く
 滅ぶとあるしハ禁脞の術して蝗と解し今もそれ
 の一あり本藩の俗田に蝗つぎうう時ハ必勢島廟に禱
 祝て虫拂と祈ふ十と七八年災を免るふとあると蓋 皇
 孫尊始高千穂峯に降臨の時散米とありて雲霧の害を
 拂ふとい故実子授とあり義氏曰慈虫ハ苗立にあり稠く
 種とおろし苗瘦て生きたるは虫生むは稀く蒔てたま
 苗ハ必虫つぎううは旱地治之の藤末なりゆふ

甲稲虫ハ田と深水ありて株を付らると流ると又ハ各
と使して深く掘り又蜘蛛の出穂と喜ぶ田ハ十月五日
の畔ハ葛葉と夏一燒び枯草ハ乳附魚ハ赤蜘蛛の子と拂
よよる翌年掘の網と法ハレの患ナリ一年相州足柄郡ハ蜂
蜂の如き羽虫稲ハ付押並て穂と出しうハ次第くハ法
とびあや何とともなごさやうなく強びあつて是時おハ
上横鎮守ハ田の神稲鬼ハおハ海を越て村長共ハ
世ハ虫除の祈と呪十たじハのくともハ五文字と句の
上ハ立てあつてあめじりの神の志うハあけの日の
あつた乃くうハうたなさと云歌と残ハ書て竹ハ挿と田

毎ハ植込ハ入て明松とうり立田の中ハ植ハ赤竹の本
より稲と分て縦横ハ行通り丈より川原ハ築り明松と
持てあつて一耕作の地の乃けハ篝のごとく火と燒
しあつて一と約ハ其自あなり初秋の鐘とねあつて
あつたハ一こまを出て面ハ田毎ハいづれわたりうり明松
とあり立く稲と分て田の中と十字字ハ通り立いや
と上て川原ハ備ハ走り明松と一ハ持て礼をうて備
りあつた場ハハあつて篝火と揚りの折句と唱田神と祈
りうり火の光と追てあつたハ形ハ篝火の本ハ落て稲
虫落く候ハ候ハ雨降秋風冷やうと吹ぬとハ虫患

く失てざるをさへも出送ハ所くハい草火ハ揚明ハと立
て決く田の中と追出ルま志くハいなりハと志くハ今詩
大田云去螟螣及其蟲賊無害我田穉田祖有神秉畀炎火
註蟲蝗則非人力所及也故願田祖之神持此四蟲什之炎
火之中也姚崇遣使捕蝗引此為證夜中設火大邊掘坑且
焚且瘞蓋古之遺法如此是和漢同日の談ハなりハ其
氏ハ之ハ取リりハや今或鐘鼓して田畔と躍ルりハ出
と掃と送ルと云ふと日次紀ハハハ今清人
の油鯨の脂ハと澆ス之ハと保スと志スるハの法ハなりハ○今清人
蝗蝻ハと驅除スるハ其所の里長夜戌の時先北方ハ一向ハて拜

祭祈禱の法あり願ハ臺ハとて長二宿帳の龍乃像ハと祀スハ
残シて全解ハと流ルりハ洞ハハハ寸ハハハの短香四束の中二束ハ
頭ハより腹ハまで焚スし二束ハ尾ハより腹ハの中ハまで焚スし丸木
二本とりて龍ハと撃スるハやうハハハ又白虎の二字紙本牌ハ
書テて逆シ田の四方ハ樹ツ四方の畔ハ道ハより金鼓銅鑼ハ
撃ツるハとハ一時ハ不レどハ其ハ留ルるハ線香ハもハやハきハまハじハ柱ハ
継リりハかくハ一ハつハ他ハの田ハ移リ行テ一時ハづハ亦ハかくハの
ぶハくハはハ是ハ西省巡捕司顔家選テるハ甲申の
歲沖繩島ハ使シりハてハ授ケりハ所ハありハと云ハ
槐ハが錢穀備要ハ捕蝗の按ハ越語稻蟹ハ注食稻蟹ハと云ハ云ハ
説極テ詳ハ蝗條ハに記セりハ



里平江記事云吳中蟹危如蝗平田皆滿稻穀蕩盡又天工
 開物云陝洛之間憂蟲蝕者或以砒霜拌麦種与此等子て
 と漢国風土の醜薄と知べし○或人のいひく風ありハ
 天地とんき清るの大徳あるものありて此皆を草木と
 抜き深ほいどの風あり候る時タニナカハル非常俊傑と出来ぬ陽陰
 と分別ソキタマなれうきあふハ尋常ナニクの凡俗のとも多かるといへ
 且治亂の氣運ハ志ばらくおく至し最バとありと熱風
 荒水アサキてふものおほぐきあはふ穀の實人間の種とど
 かいりけり結るべき是もむりてハ天災の致す所人カ
 のいりんとしなしぐさまわびあり候はば天武天皇

と勅して祠風神于龍田立野又祭大忌神於廣瀬河曲
ふこと威くまらされ祝詞ハ天下乃公民乃作物乎
惡風荒水爾遇都々不成傷波ふどるえ
風不吹稼穡滋登大忌祭令山谷水變成
甘水浸潤苗稼得其全稔故有此祭也 嵯峨天皇弘仁
元年敕曰夏苗已成秋稼始熟恐風雨失時嘉穀被害宜遣
使畿内奉幣名神よし後紀子載是なり○後頼雜談鈔子
信濃國風神と云ふ風祝部の名所也信濃なる本曾治
の梯咲まりと風の経みとさる所くとも信濃ふハ地勢
高く極て風疾きなり是れ因て風間神社風間村等の
名たるなり袋冊子子源方明神の社子風の経といふ

めとて深く着居候と云て百日の曾言をたふこもふ
とさされバ風靜ふて農業乃るよ因出をり少の寸き曾
もろて日乃走と尺せらまバ風流くかど塔回き俗事と
は又えきと何ふふてと風の暴ハ作物の片をりすれば
結風乃祭と云ふて此類は枚考をるくは蓋先王
敬畏の心と存して氏と視るふと傷りぐくそ惻怛の
懐り上下小禱爾一幽冥の神功は頼は天地和順五穀豊
衍豈啻頭露の政道あらんやとええふとふの理とい
ふる一 一條天皇ハ冬の夜は御衣を脱ておもしろふ
と上東門院のあどかくハせき路路を同きりれば

日本國の民もむろくく我のりありあつたりたるなり
ら、後と仰らまはし事と後、末極極政よみまをりふた
四より、五と仰らまはし事と申すまむりき民乃其の執
ふく

今上皇帝の大御歌あつゝ家かきあつゝ執事おりよどよ
為か〜ん〜のひ〜はい〜つ〜き〜を〜給のふ〜
人子切あればかかはあられ〜お〜り〜あ〜ら〜お〜り〜
あ〜ら〜あ〜ら〜あ〜ら〜あ〜ら〜あ〜ら〜あ〜ら〜あ〜ら〜あ〜ら〜
炭左右或啟曰今日若寒上曰天下民困是寒者衆矣朕何
獨温愉哉と異域同日の談と〜ふ〜
臣國柱謹按よ世の仁君仁人政と

為の通ぬを飽燻之と外も反して之を庶民も亦し昔吾
宰相、庚征韓の役、泗川新寨の孤墻、嬰守者二万人朝
鮮固より寒地夜或ハ臣庶と雜居て火と擁じ、急未嘗
て憂樂と共せむん、何〜時〜加〜着〜清〜心〜の〜卒〜位〜あ〜
〜ら〜り〜く〜薩〜軍〜ハ〜頗〜主〜役〜の〜礼〜あ〜き〜ハ〜似〜し〜り〜と〜信〜心〜
〜を〜念〜終〜と〜し〜て〜卒〜位〜の〜不〜知〜と〜戒〜て〜曰〜上〜下〜貳〜を〜故〜と〜同〜
〜空〜と〜是〜君〜臣〜の〜と〜合〜さ〜る〜と〜多〜し〜と〜歎〜せ〜り〜と〜云〜ふ〜と〜ほ〜り〜し〜れ〜バ〜
〜明〜將〜董〜一〜元〜十〜万〜兵〜と〜取〜て〜新〜寨〜と〜攻〜圍〜ふ〜と〜數〜重〜矣〜と〜慶〜
〜長〜三〜年〜十〜月〜朔〜日〜吾〜侯〜殺〜出〜し〜て〜大〜に〜明〜兵〜と〜擊〜破〜り〜と〜一〜斬〜
〜ふ〜と〜斬〜獲〜四〜万〜級〜と〜得〜り〜と〜遂〜に〜天〜兵〜般〜師〜の〜行〜を〜啟〜き〜
〜永〜く〜日〜國〜の〜威〜稜〜と〜失〜は〜れ〜抑〜を〜存〜け〜く〜不〜君〜は〜一〜婦〜恩〜義〜
〜兼〜行〜る〜の〜殺〜は〜あ〜ら〜ず〜や〜捕〜中〜將〜曰〜合〜戰〜の〜勝〜敗〜未〜だ〜か〜ら〜必〜し〜
〜と〜兵〜の〜衆〜寡〜は〜あ〜ら〜ず〜唯〜士〜卒〜志〜と〜一〜に〜さ〜ら〜る〜と〜せ〜ら〜る〜と〜
〜の〜と〜抑〜は〜私〜勢〜の〜力〜に〜か〜か〜ず〜い〜つ〜と〜も〜理〜ハ〜公〜古〜今〜交〜ふ〜
〜る〜は〜と〜多〜し〜故〜に〜事〜此〜よ〜つ〜つ〜て〜お〜ゆ〜ふ〜也〜や〜い〜ふ〜と〜何〜を〜
〜は〜周〜て〜附〜記〜と〜云〜ふ〜
或老農のい〜〜耕作ハ曾ハ子と滑つるが〜〜今
ハ乳がわ〜〜乳を〜〜ハ何つ〜〜乳を〜〜ハ乳を〜〜

一と寐てを寝てと棄志と云々人々知りてハ貴とく
是渴クんと見てハ名と凌ぎ根莖よとく人々念を
ハ草と耘り雨風と獲り凌ぎ凌ぎ之と培之と枝出つク
ハ秋宜術添て取絶一農夕と耘育ると知ハ土地の肥瘠
みと拍出苗稼の不熟ハなるふるといつハ是種樹家
の常識といつとも古の懶惰人田地の管ハ疎ふと
勃とそれ高き田り希高産の利とて活人々食ふ
之の小較ぶとバ殖殖みして農圃の三味と得とふとい
ふや一或曰然風多と吹て田と畑と穂波と打て作り物
悪く荒きとんと知り一と作り物よはおのみの外風あ

うらぬも何とよく作りき保物と云々人々知りてハ貴とく
かゝる時ハ家の内管と出て外踏まると風の中らき保
とてそまると埃塵バ田わ日踏てハ風のつとて出て植
附といつりされバ大風洪名の後は畑とのハ根と露
稲ハ穂とる穂の名腐とぬやに其時ハ除て助る真と
べーと地を也界東よハ大風吹て作毛とあつと云ハ
つと稀と云々也○りーと人々民と使ハ工と興と云ハ
農の時ハ違ふ守料の名を共とれと緊要の教戒と云ハ
仁徳紀曰不可以私事之故止耕穡之時也持統紀六年三
月將以幸伊勢中納言三輪朝臣高市磨敢直言諫爭妨於

農時不聽於是高市曆脱其冠位擊上於朝重諫曰農作之
節車駕未可以動矣天皇遂不從諫同年五月詔筑紫太宰
率河内王等曰宜遣沙門大隅與阿多而傳佛教矣阿多ハ
摩國今按是本藩佛法流布の始なる處一嗚乎帝女上あし
て己は高市曆農時と妨く怒りくぐりの直諫と聽納玉
ハ又胡教と毒敷し禍端と百世小疊り何代の女上
ハ佛は淫し民と傷ざはあしん然と凡同七年
詔令天下勸殖桑紵梨栗蕪菁等草木以助五穀又大赦天
下鰥寡孤獨篤癡貧不能自存者賜稻蠲服調役あふた
あり此帝をかしく純過と悔復善政と修あふたの

あり史記は肅侯游大陵出於鹿門大戊午扣馬曰耕事方
急一日不作百日不食侯下車と肅侯馬と扣あふたの諫と
嘉納以振周癸は是あふた中野家集は神いちて極し
あふたはもは田と詭りは知て物まきん是復物
鹿狩とあふたの時帝と考へど農稼の害とあふた
ざらあふた戒示してよあふたしり漢武帝嘗入南山
下射獵馳驚禾稼之地民皆号呼罵詈といふに似る付
あり

成形圖說卷之三終



此圖說卷之三終

